

2019 年秋

國立交通大學理學院

四十周年專刊（2019 年秋發刊）の

肆 啟山林者（歷代理學院長に聞く）

「獨飛，領飛，放手飛」 李 遠鵬

より、増原に關係する部分の和訳

	目錄	編輯 p.1 謝序的謝辭 p.2
	肆 一 啟山林者 ——歷任院長專訪	
	郭南宏 p.74	黃為德 p.80
	鄭國順 p.83	郭義雄 p.88
	郭滄海 p.93	褚德三 p.97
	林松山 p.102	張豐志 p.108
	李遠鵬 p.111	莊振益 p.118
	盧鴻興 p.123	李耀坤 p.127
	陳永富 p.133	歷任院長餐敘 p.140

一人始め、導き、後は任せる

啟山林者

獨飛，領飛，放手飛 李遠鵬

採訪 / 吳盈熹、范瑀真
撰文 / 范瑀真

學而優則仕，這條路徑不只是古代讀書人的「指定賽道」，在今日台灣亦為學界鉅子拓展事業第二春的熱門選項。但也有一群「學術狂人」，若擔任行政顯要是「江山」，研究與教學是「美人」，他們肯定直奔美人懷抱。交大理學院的箇中代



「いざ、国際化へ」

一日本人研究者の長期駐在一

李遠鵬教授が理学院院長として在職した3年間において、最も代表的な実績は交通大学応用化学科と電子物理科における国際交流の推進である。現在、交通大応化の教員一覧を見ると、「紫綬褒章」を受章した増原宏教授と浜口宏夫教授をはじめ、多くの日本人教授の名前を見つけることが出来る。世界的に著名なフェムト秒分光の小林孝嘉教授は交通大電物科において10年以上の長期にわたり研究を行っており、また、昨年には低温物理の河野公俊教授が交通大へ移り、研究を開始している。

李教授は、いきなり著名な日本人教授をフルタイムで交通大へ招聘するのは難しいと考え、まずはその学生を招聘することから始め、学生との交流を深めたうえで、教授陣を招聘しようと計画した。しかしながら交通大は准教授や助教も含めたグループ全体を招聘することで、日本人教授たちが交通大に魅力を感じ、招聘に応じる可能性が高まると考え、潤沢な研究費を用意した。

数年後、数名の著名な日本人教授の招へいが実現した。日本人教授たちは研究設備を交通大に移し、交通大で研究を続けることになった。昨年、河野教授は彼の研究設備を交通大へ移しただけでなく、理化学研究所から獲得した1年あたり1000万円の研究費を持って交通大へ移って来た。

日台交流を積極的に推進：驚くべき行動力を持つ増原宏教授

日本から来た教授陣のうち、台湾に最も貢

献したのは増原教授である。増原教授の貢献について、李教授は淀みなく紹介した。十年ほど前の増原氏との短い会話がきっかけとなり、当時は思いもよらなかった活発な日台交流の扉が開いた。当時、李教授は増原教授の生徒たちを交通大に呼ぶことを計画し、まず最初に増原教授を交通大へ招待した。当時、増原教授の研究をサポートしていた日本の財団法人が都合によって解散することになったこともあり、李教授は増原教授に台湾に移って研究を続けてはどうかと提案した。その当時は増原教授も容易には信じられないような提案だと感じたに違いない。

李教授は呉重雨交通大校長からの全面的な協力と台湾政府の教育部から潤沢な資金の提供を受け、増原教授と積極的に話し合いを進めた。研究費を用意するだけでなく、日本の講座制を台湾でも実現できるようにすると李教授は請け負った。「日本の大学の研究体制は台湾のそれとは違っている。日本では基本的にグループで研究を進める。1つの研究室には教授のほか、准教授、助教が必ずいる。准教授や助教が独立して研究室を持つ台湾の制度とは違う。これを理解し、増原教授が台湾に来て日本と同様の研究体制を維持することが出来るように準備するつもりだ、と増原教授に話した」。双方が合意に達してから2カ月足らずで、交通大応用化学科は増原教授のために全ての手続きを完了し、研究室と設備を整えた。「増原教授の台湾への貢献度は、他のどの教授よりも高いと私は確認している」。増原教授は自分の研究に邁進するだけでなく、台湾の若手研究者を日本の学会に連れて行き、発表を行えるように手助けし、そうした中で両国の若手研究者同士の繋がりも深まるように努めた。そのうちの数名は講演奨励賞を受賞したこともある。また、増原氏は40名の若手研究

者が在籍する日本の JST 増原さきがけプロジェクトの責任者として指導していた。「増原教授は、プロジェクトの研究者を台湾へ招いた。彼は日本の若い世代の研究者も台湾のことをよく知り、台湾の若手研究者と交際し、関係を深める機会を持つべきだと考えている」。

近年、増原教授の影響力は「研究方面」のみに留まらず「教育方面」にも及んでいる。例えば、いくつかの日本のスーパーサイエンス高校の先生と生徒が海外研修旅行で交通大を訪問したいという希望を受け入れ、交通大の施設を紹介し、学生間の交流を推進する機会を創成している。1校だけではなく、毎年2・3校を受け入れ、その結果、合計80人～100人の日本人高校生が交通大を訪れている。他にも、毎年夏休みには海外の有名な教授を講師として招待してサマーコースを行っている。昨年は日本の大学院生が25人参加した。今年はオーストラリアからの大学院生も参加した。このような活動によって、増原教授は台湾の若手研究者に早い時期から国際的なネットワークを築くきっかけとなる素晴らしい機会を与えている。「彼は本当にエネルギッシュで活動的だ。このような国際交流は我々台湾の学生にとって何よりも貴重な経験になる」と李教授は称賛している。

このような増原教授による活発な交流推進によって、交通大の知名度は上がり、ますます多くの日本人教授が交通大へ移り研究を行っている。国際的なハイレベルな学者が交通大を訪れ、台湾の研究文化に多くの活力を注いでいる。更に、自身の研究キャリアを台湾でより長く続けることができるというのは、日本人教授にとっても良い選択となるだろう。そして、特筆すべきことに、交通大の増原研の卒業生の1人が、これまでの国際交流の機会を生かし、日本の関西

学院大学の助教に就任している。

相互に利益をもたした10年以上にわたる交流は、歴代の学部長によって引き継がれ、歴代の校長の強力な支援を受けてきた。李教授は、これらの交流を最初に始めた先駆者で、彼の功績を全て後継者に引き継いだ。「天の時は地の利に如かず。地の利は人の和に如かず。これらはすべて交通大学の開放的な校風と管理部門の柔軟な協力体制があってこそ実現したことだ。また、教育省の5年間500億元がなければ実現できなかった。呉重雨校長と、後任の呉妍華校長、張懋中校長に感謝している。彼らは私を完全に信頼し、強力なサポートを与えてくれた。細かなことについて指示を仰ぐ必要もなく、自信を持って様々な交流計画を推し進めることができた。」

※国立交通大学理学院40周年記念誌の「歴代院長の言葉」より、李教授のお言葉を抜粋しました

學而優則仕，這條路徑不只是古代讀書人的「指定賽道」，在今日台灣亦為學界鉅子拓展事業第二春的熱門選項。但也有一群「學術狂人」，若擔任行政顯要是「江山」，研究與教學是「美人」，他們肯定直奔美人懷抱。交大理學院的箇中代表人物，無非是在海內外獲頒榮譽無數的中研院院士——李遠鵬，交通大學理學院第十任院長。李遠鵬人如其名，志在更寬廣的科學殿堂，行政工作關不住他的翅膀。然而與他共事的同仁都知道，他的行政能力高超，沒有續任院長不是「不能」，而是「不願」。

李遠鵬雖自承對行政「沒興趣」，卻在院長三年任期做了相當十年的重要工作：設立前瞻跨領域基礎科學中心、理學院學士學位學程班、完成科三館興建構想書及設計、整修科一、科二館、支持新創開放式課程（OCW）、以及透過高強度的國際合作等方式，拉拔理學院迅速壯大。

轉任交大還接院長，清華同仁：跌破眼鏡

回首 14 年前，當李遠鵬要從清大化學系轉往交大任職時，他的同仁對此「搬遷」是相當錯愕。「很多人覺得不可思議，為什麼我從一個那時候比較好的系跑到一個比較差的系。」誠如眾人之惑，客觀來看當年台灣的理學院，交大的理科研究無論是 paper 的發表數目、成就、國際名聲等等，都遠遠落在台大、清大之後。那李遠



——關於 李遠鵬

第十任院長（2005 – 2008）

■ 學歷

加州大學柏克萊分校化學博士（1979）

台灣大學化學系學士（1973）

■ 經歷

新世代功能性物質研究中心主任

（2018 – 2019）

前瞻跨領域基礎科學中心主任（2006 – 2017）

交通大學理學院院長（2005 – 2008）

交通大學分子科學所所長（2004 – 2007）

交通大學應化系、分子科學所講座教授

（2004 –）

東京大學講座教授（1997）

中央研究院原子與分子科學研究所合聘研究員

（1988 –）

清華大學化學系教授（1985 – 2004）

清華大學化學系副教授（1981 – 1985）

美國海洋及大氣總署環境研究所研究員

（1979 – 1981）

鵬為什麼會做此決定呢？他解釋，時任校長張俊彥請了中研院院院士林明璋來到應

因不易吸引日本大牌教授來交大全時工作，院裡先聘用了這些大牌教授的學生，透過他們建立起橋樑，接著再進一步力邀教授們來合作；或是學校要給予充分資源，一次聘任含副教授和助手的團隊，才有機會吸引他們前來。

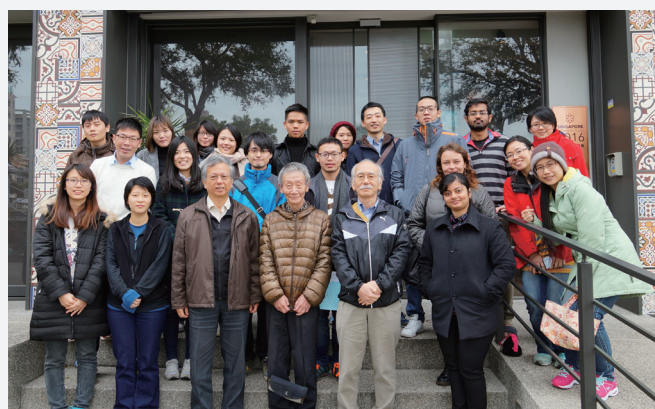
等到後期，交大接納日本教授的名聲打開了，日本教授都願將儀器搬來交大，延續他們的研究生涯。「去年來到交大的河野公俊教授，他不僅搬儀器，更從日本理化研究所每年帶 1000 萬日幣過來，供研究運用。」

積極協助台日交流，活動力驚人的增原宏

這些教授中，增原宏對台灣的貢獻最大。談起他的貢獻，李遠鵬如數家珍，語調也輕快了起來。遙想十年前，增原宏與他的一場對話，竟開啟日後如此蓬勃的台日交流，似乎連他自己也未曾想過。當時李遠鵬邀增原宏來台訪問，原是計劃要聘其學生來交大展開合作，孰料那時在日本資助增原宏的私人基金會因故要關閉。「所以我就跟他說，那你要不要乾脆來台灣，我相信他那時候也覺得不可思議。」

欲借東風的李遠鵬，左有校長吳重雨全力支持，右有教育部的充裕經費，他便積極和增原宏協談。除了給予研究開辦費，李遠鵬也承諾盡量讓增原宏維持日本制度：以「整組團隊」為單位的人力配置。「日本跟我們不一樣，他們除了教授，一定要有一個副教授、一個助理教授（助手），所以我們就維持這樣的制度給他。」從雙

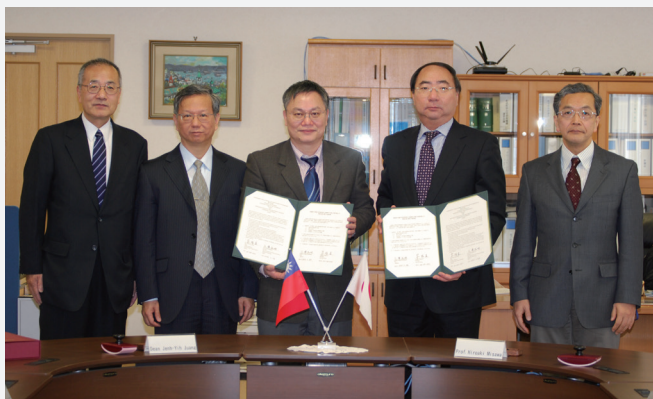
方達成共識，到應化系這邊走完程序、備妥實驗室，前後不過兩個月的時間。「結果他進來後，我相信他對臺灣的貢獻是無與倫比的。」增原宏不單只是做自己的研究，他還積極幫助台灣的年輕科學家與日本建立關係、協助他們去日本的學會演講，甚至推薦得獎。李遠鵬提到，增原宏在日本也負責指導一個研究學者群組，裡頭大約有三、四十名年輕學者。「他就把這三、四十人都帶來台灣開會，他認為日本年輕一代也應該要認識台灣，要跟台灣年輕的科學家有往來、做朋友。」



李遠鵬與實驗室學生、日本教授們聚餐合影。（圖片來源 / 李遠鵬提供）

近年，增原宏更將他的影響力從「研究」推展到「教育」層次。他號召日本科學高中的師生前來交大理學院參觀、座談，「而且不只一個學校，是兩三個學校，人數 80 幾到上百人不等。」每年暑假他也會舉辦暑期課程，請大牌外籍教授來指導。去年起有 25 個日本學生一同過來參加，今年連澳洲的學生都會加入，讓我們的學生早早建立起國際網絡。李遠鵬讚嘆道，「他的活動力真的是不得了的，而對我們的學生來說，有這些國際的經驗是很好的一件事情。」

漸漸地，在這套交流互惠模式打開知名度後，越來越多日籍教授加入行列，也越來越多日本人認識交通大學。這些國際級學者為我們注入豐沛的研究能量，同時對他們而言，能夠來台延續研究生涯，亦不失為一個好選擇。而我們的學子，已有一位因為此種交流，現已在日本擔任助理教授。



2011年理學院幸由太田信廣教授（左一）作媒，與北海道大學電子研究所所長三澤宏明簽訂合作協定。交大代表團為太田信廣教授、李遠鵬前院長（左二）以及時任院長莊振益（左三）。（圖片來源 / 李遠鵬提供）



2012年李遠鵬參加第七屆亞洲及大洋洲光化學會，受邀參加開酒儀式；2018年更榮獲「亞洲及大洋洲光化學會增原宏講座」。（圖片來源 / 李遠鵬提供）

十多年了，這條雙贏之路仍透過後繼院長們接續耕耘著，並得到歷任校長們的大力支持。李遠鵬是開路先鋒，他卻把功勞都「推」給別人。「這個也是要天時地

利人和，要有交大開放的風氣及靈活的行政才可以做成；若沒有教育部的五年 500 億，也不可能做成。我也很感謝吳重雨校長以及其後的吳妍華、張懋中校長，他們給我完全的信任及大力的支持，所以我不用事事都請示，可以放心去做。」

在研究狂熱中，用規劃平衡生活

春秋以來我們從幽默的孔先生那裡得知，做學問有「止飢、解憂、抗老化」的神奇功效。在這方面，李遠鵬恐怕更勝一籌。他曾風趣地對辦公室同仁說，每當覺得有感冒跡象時，只要進實驗室便「不藥而癒」了。「因為我喜歡研究工作啦，注意力轉移了之後，身體的一些不適就拋到腦後去了！」李遠鵬對做研究樂此不疲，他笑說即使到了現在，每週一、四仍鑽研到半夜才離開學校。「因為南大門要關了，所以我只能待到半夜，如果有選擇的話也許我會待更晚，因為跟老婆請假，兩小時也算一次，六小時也算一次。」此話驚為天人，莫非他竟會如學生一般熱血「看日出」？原來純屬俏皮的玩笑一場，他直言「倒是不會做到天亮，身體還是重要，年輕的時候我也不是會任意熬夜做事情的人。」想不到以嚴謹形象示人的李遠鵬，其實有這活潑靈轉的一面。

「我想我對時間的規劃及掌控都還不錯，他們應該很少看到我焦頭爛額、超過期限才交卷的時候。」李遠鵬在當院長時，發表的論文數也絲毫沒有減少。他表示，當事情都按部就班地照規劃走，自然能平衡工作和生活。同仁吳盈熹也回憶道，李遠鵬雖然公務、研究繁忙，仍不忘陪伴家